会　告

二〇一五年度史学研究会大会および総会は、予定どおり一一月二日（月）午後一時より京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールⅠ・Ⅱにて開催されました。

公開講演は、新納泉、松浦茂の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

前方後円墳が語る〈倭算〉の世界　新納　泉氏

一六八〇年代ロ清の衝突とネルチンスク講和会議
——国境の画定について——　松浦　茂氏

なお、大会と総会に先立って開催された定例の理事会・評議員会において、二〇一五年度会務報告がなされました。

二〇一五年度 史学研究会大会講演要旨

前方後円墳が語る〈倭算〉の世界

新納　泉

日本列島において、三世紀中頃から七世紀初頭までの五〇〇年足らずの間に、五千基を超える前方後円墳が築造された。大は墳丘長四九〇mに及ぶ大仙古墳（仁徳陵古墳）であり、小は二〇m程度のものもある。北は岩手県、南は鹿児島県まで分布し、似た形態の墳墓は朝鮮半島の南西部にも十数基みられる。これらの前方後円墳は、どのような設計で時を通じて伝達され、各地域に伝えられたのだろうか。

この課題を解くために、半世紀以上にわたって精力的な議論が重ねられてきたが、多くの研究者が納得できるような設計原理が提示されるには至らなかった。いくつかの古墳にはうまく適用できるようにみえる原理が、他の古墳にはあてはまらない。適用できると主張される場合にも、恣意的な解釈が排除できているとは言い難かった。従来の粗い等高線による測量図では、真相に迫ることはあまりに困難だったのである。しかし、最近の航空レーザー計測をはじめとする計測技術によって、測量図の精度は大幅に向上した。立ち入りが認められない陵墓のような樹木が茂る古墳でも、十分に満足のいく精度の測量図が作成されるようになり、改めて設計原理を検討する環境が整ってきたのである。

講演では、墳形をよく残す前方後円墳としては最大の例である、誉田御廟山古墳（応神陵古墳）を例に取り上げ、高精度の測量図から復元される前方後円墳の新しい設計原理を紹介した。それは、三段に築成されている墳丘の、下から一段目と二段目の上のテラスの幅が長さの基本単位となっているというもので、誉田御廟山古墳の場合は後円部の半径が基本単位の一五倍となる。また、その基本単位は、中国由来の尺度に基づくもので、六歩（一歩＝六尺）に相当する。そして、後円部の墳丘の傾斜は六歩に対し二・五歩上がるというものである。さらに興味深いのは、前方部の前面は基本単位の長さが七・五歩で傾斜はそれに対し三歩上がっており、後円部よりやや緩

やかとなっていることである。

短い文章で設計原理の全貌を示すことは難しいが、誉田御廟山古墳の場合は、このように少なくとも二種の長さの基本単位が用いられ、傾斜は直角三角形の底辺と高さの比を駆使して設計されていることが明らかになった。おそらく、少なくとも大型の古墳の場合には、こうした一般的な原理に従いながらも、個々の古墳で固有の設計原理が構想されていたのだろう。これまで、長さの単位として、後円部の直径の六分の一や、八分の一、さらには二四分の一という長さの諸説が提示されてきたが、一元的な単位を求めること自体に無理があった。テラスの幅を基本単位とするなら、後円部の半径はその一二倍から一六倍までのすべてが存在することになる。三で割り切れるものもあり、四で割れるものもあるが、一三のようにいずれでも割り切れない例も存在しているのである。今後は、こうした多様性に富む設計原理の比較を通じて、設計の技術がどのように展開したのか、どのような系列をもっているのか、どのように各地域に伝えられたのかが明らかになっていくであろう。前方後円墳の設計原理が、古墳時代のイメージを一新させることになるかもしれないのである。

このように、当時の人びとが採用していた設計の方法は、私たちが慣れ親しんでいる、紙の設計図とは大きく異なるものであった。それは、頭の中に描かれる数値の組み合わせであって、そうした数値の記憶を積み上げていくという方法は、まさに非文字社会にふさわしいものといえる。また、実際に使われている計算は非常にシンプルなものであって、掛け算も足し算に毛が生えた程度といえるかもしれない。しかし、たとえ計算はシンプルであったとしても、それを組み合わせて全体を構想し、美しい前方後円墳の形にまでまとめ上げていく力は、驚くべきものであるといえる。江戸時代の和算にちなんで、前方後円墳の設計原理に隠されている算術を、〈倭算〉と呼びたいというのは、そのような理由からなのである。

一六八〇年代ロ清の衝突とネルチンスク講和会議

——国境の画定について——

松浦　茂

ネルチンスク講和会議とその成果であるネルチンスク条約は、その後のロ清関係と東アジアの秩序にとって重要な一歩である。しかしその内容や交渉経過をめぐっては様々な評価があり一定しない。今回の発表においては、双方の史料にもとづき両国の立場・考えを紹介しながら、真相はどうであったのかに迫りたいと考える。

ステパノフの船団を壊滅させた後、清はアムール川中流住民の交易活動を利用して、アムール川下流住民への働きかけを積極化し、その下流沿岸に辺民の組織を作り上げた。一六六〇年代にはその河口及び左岸の支流、ゴリン川やアムグン川にまでそれを拡大した。一六八〇年代になりアルバジンとヤクーツクのコサックが、アムール川の河口や左岸支流の沿岸に侵入して辺民を圧迫したことから、両国の争いが勃発する。清は争いの元凶はアルバジンと考え、まず

ロシア人の前線基地であったゼヤ川やトゥグル川の沿岸を制圧し、それからアルバジンを攻略しようとした。清がアルバジンを再包囲していたときに、ロシアの使者が北京に入り、両国の講和会議が開催されることになった。

ロ清両国が対立していた時期、清はロシアと戦争になることを回避し、外交交渉で問題を解決することを望んでいた。たとえばアムール川流域から自主的に撤退するように求める文書（手紙）をロシアにたびたび送っていたし、実際にアルバジンなどを攻撃したときは、戦いを始める前に必ず康熙帝の上諭を読み上げて降服を勧めた。不幸にして戦いとなったときにも無益な殺戮を行わず捕虜を解放することは、康熙帝の方針であった。一方ロシアも貿易を重視する立場から、清との平和な関係を望んでいた。ネルチンスク講和会議が開催され両国が平和を確立した背景には、このような両国の意志があったのである。

ネルチンスク講和会議における主要な議題は、平和の問題と国境の画定である。後者に関しては、アルバジンとトゥグル川沿岸をどう分割するかで、激しい論争となった。これらの地域は両国の勢力圏が接触し、たがいに領有を争ったところである。

会議前半の山場は、アムール川のどこを国境にするのかの問題で、ゴルビツァ川にするかあるいはアルバジンにするかで対立した。このときは清が軍を移動させてネルチンスクを包囲する示威行動を行ない、それに屈したロシアが清のゴルビツァ案を飲んだといわれる。しかし見落としてはならないのは、それと同時に清が新たな条件をロシアに提示していたことである。すなわち清はアムール川の南岸をアルグン川で分割する案を提出し、さらにはロシア商人に自由貿易を許すことも約束していた。これらはロシアに対する清の譲歩であった。おそらくロシアはアルバジンを失うのに見合う利益を得たことにより、ロシアはゴルビツァ案を受け入れたのだろう。

後半では、内陸部の山脈（「石の山」）をめぐって対立が起こった。前半の協議で清はそれをアムール川に近い位置に示していて、ロシアはそれをロシア領のウダ川の南にあると理解していた。そもそも「石の山」は黒龍江将軍サブスがトゥグル川でみた山脈に起源を発するものであった。ところが清は、突然それがヤクーツクに近いウダ川より北にあるノス山に達すると言い出した。もしそれを認めれば、広大なロシア領が清領に含まれることになり、ロシアがそれに強く反発するのは必然であった。一時は会議が決裂するかと思われたが、清がその非を認めたので、協議は続行された。その結果、両国はウダ川までをロシア領と認め、それから南アムール川までの、海に注ぐ河川とその間の土地は帰属を決めず、後日決定することになった。

ネルチンスク条約で決まった国境をめぐって、十八世紀以降の学者はそれがあいまいだとして様々に解釈しているが、その多くは根拠がない。一六九〇年に清はアムール川北岸地域に調査隊を派遣して、ロ清間の国境を調査させて、アルグン川河口、上流のゴルビツァ川河口東岸、トグゥル川の北に国境碑を置いている。また一七二六年～二七年には北京で両国の代表が会議して条約草案を提出したが、ロシアの解釈はネルチンスク条約に沿ったもので、それと矛盾はない。国境をめぐる両国の見解は、当初は完全に一致していたのである。